

二瓶先生との若き日の共同研究，そして一昨年の熱き教育談義

学長 池 島 政 広

二瓶先生，そして若林先生と私の3名は，1973年に本学経営学部に助手として奉職いたしました。この年は第一次石油ショックで物価高騰が起こり，激動が予感される時代の始まりでありました。1970年に商学部が改組されて新たに誕生した学部であり，当時は経営学の大御所である古川先生はじめ経営，会計，マーケティングの領域で誰もが知る著名な先生方が招聘されておりました。教授会などで話をする際には，とても緊張したことを今でも覚えております。私どもは，各々異なる大学院博士課程に在籍しながら，助手として教授会の準備など色々な仕事を持たされておりました。今となっては信じられませんが，はじめのうちは，一つの研究室を一緒に使用しておりました。しかし考えてみると，そこで色々な話が出来たことは良かったのかもしれない。

二瓶先生への第一印象は，学問に対しての取り組み方に非常に厳しかったということです。これから，専門領域として研究していくマーケティングを社会科学の中でどう位置付けていくかにご関心を持たれていたと推察します。社会科学の方法論についてとても勉強されていたようです。私自身は，電通の人たちと一緒に広告効果の計量モデル作りなどに明け暮れており，大学の研究者として，これで良いのかと悩み始めたことも事実でした。現在でも，私は産業界の方と一緒に仕事をしていますが，常にどこまで大学の研究者が関わるべきか考えております。アカデミックな研究に打ち込まれている二瓶先生との普段の会話は刺激になったのだと思います。

その後，数年が経ち，私のほうは，通産省（現経済産業省）における企業の経営力指標のモデル作りの仕事で忙しくしておりました。このモデルにおいて，企業の業績に関連する大事な要因として製品開発マネジメントがクローズアップされてきました。このマネジメントの解明に強く関心を抱き始めました。一方，二瓶先生のほうは，マーケティングの研究を進められて，製品差別化の問題に関心を持たれたようでした。製品というコンセプトが二人の研究の共通項として出てきました。顧客のニーズにマッチ，あるいは新たな顧客を創りだす製品を開発・提供していくことは企業にとって極めて大事なことであるとの共通認識でしょう。

そこで二人で相談し，家電メーカーを分析対象に1980年に「我が国家庭電器製造企業の製品開発に関する実証研究」を他の数名の先生にもご参加いただきスタートさせました。経済発展の原動力の一つとなった業界を取り上げ，製品開発を戦略的な視点から分析を試みたわけです。色々な企業を一緒に訪問しましたが，二瓶先生に紹介いただいた三洋電機のトップの方との論議は，今でも懐かしく思い出されます。その後，二瓶先生は製品開発をマーケティングの視点から分析され続け，2008年には『製品戦略と製造戦略のダイナミックス』を著されております。私

のほうは、製品開発については技術経営的な側面から分析を進めており、また機会があれば研究の面でも論議できればと思っております。

また、二瓶先生は、学生への教育に極めて熱心に取り組まれてきました。「自学力」というキーワードを使われて、教育の仕方に信念を持たれていたようです。学生への勉学へのモチベーションを高めて、学生自らが学ぶ態度を身につける必要性を説いています。2007年には『自学力のための技術』を著されております。経営学部のオリエンテーションゼミで始められたインタビュー実践の優秀作品集が掲載されている報告書の中に、二瓶先生と私の対談「今、就業力を考えるということ」が取り上げられています。一昨年末に、原学部長の司会で、初年次教育の大切さを踏まえた就業力の話題を中心に、熱く教育論議を交わした内容です。良い教育が施されるには、教員自らが夢中に取り組み、その姿が学生に伝わるのが大事ですとのご発言が印象的でした。この伝え方はなかなか難しいこともありますが、学生が自ら考える能力をいかに高めるか、これが今後の教育の大きな課題であることには異論ありません。そのための教育体制や仕組みの工夫が求められております。短い対談の時間でしたが、これほど教育の仕方について夢中になって論議したのは初めてでした。二瓶先生と多くの共通点を見いだすことができ、とても爽やかな気持ちになりました。

これからはお身体を大切になさり、ゆっくりとマーケティングの研究を進められ、その話を時折聞かせてください。また、教育体制や方法などについて、色々ご指導いただければありがたいです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。